

優しい世界

甲斐市立敷島中学校二年 吉田 葵

「人権」という言葉を知っている人は多いと思う。一方で説明してと言われてできる人は多くない。私もその中の一人だ。しかし、改めて考えるきっかけとなったものがあった。

ある日の朝。私はいつもと同じように朝食をとりながらニュースを見ていた。アメリカの中西部ミネソタ州で黒人男性が白人の警察官に九分間以上にわたって首をひざで押さえつけられて死亡したという内容の事件が放送されていた。私はこのニュースを見て、なぜ警察官は九分もの間押さえつけたのだろうと不思議に思った。

その年に行われたテニスの全米オープンについてニュースになっていた。私は驚いた。世界でも有名なテニスプレイヤーの大阪なおみ選手が三月に警察官に撃たれて二十六歳という若さで亡くなった救急救命士ブリオナ・テイラーさんの名前がプリントされたマスクをつけて試合に臨んだと報じられていたからである。これを見て、前にニュースでやっていた事件のことを思い出した。私はそれを見たとき、「そんなことがあったんだ。」という気持ちで自分には関係がないことだと決めて終わっていた。しかし、大阪選手はニュースを見て、

「私はアスリートである前に一人の黒人女性です。」

と言い、さらにインタビューでは、警察官に殺害された黒人の名前が入ったマスクを七枚持っていることを明かしていた。大阪選手は自分にも関係があるから自分が今できることは何かと考えた結果が今回のマスクだと思った。勝手に関係ないからと終わらせるのではなくできることをしている大阪選手から自分もできることをやろうという考えを学んだ。

まず私はマスクに書かれた人に関する事件を調べた。その中でも特に衝撃だったのが、決勝戦でつけていたマスクの人の事件だ。殺害されたのは当時十二歳の子どもだった。家近くにある公園でおもちゃの銃で遊んでいたところを通報され、現場へ向かったパトカーが止まる前に助手席にいた新人警察官が飛び出し、撃ったと書かれていた。公表された警察の映像では、パトカーが到着してから撃つまで、わずか二秒のできごとだったということも載っていた。私と少ししか変わらない人がおもちゃで遊んでただけで殺害されているという事

実に他人事ではないと強く感じた。このような事件が他にもたくさんあったということが調べていくことでわかった。被害にあった人がアフリカ系アメリカ人であったことから人種差別により発生した事件として取り上げられるようになった。被害にあった人が黒人ではなかったら殺害されなかったのかもしれないと思ってしまうため、差別はまだなくなっていないのだと感じた。人種が違うというそれだけの理由で亡くなってしまう人が今、この瞬間にもいるということ、平和な毎日は決してあたり前ではないことを知った。

また、これは人種差別に限ることではないこともわかった。近年ではコロナウイルスの感染拡大により、感染者や医療従事者などといった特定の人への差別「コロナ差別」も問題となっていることもニュースで取り上げられている。リスクがある中、一生懸命働いてくれている人たちへの差別が日本でもあることを知り、もっと感謝して生活しないといけないと思った。

人は自分がしていることが「差別」だと気づかずにやっていることがほとんどで、この人は周りとは違うから非難してもいい等の考えがあるのだと思う。それが起きないように、その考えがあたり前にならないように、まずは「相手の気持ちを考える」ということを意識していこうと思う。そうすれば少なくとも言われたり、されて嫌なことをすることなく、嫌な思いをする人もいなくなると思ったからだ。また、自分が見かけたときに注意したり手をさしのべてあげられるような強い人になりたいと思うし、そんな人が増えてほしいと思う。

「国」も「性別」も「障がい」も、全て関係なく「この人は自分とは違うから」と距離をつくらずに、違うからこそ認め合って手を取り合い、協力することができる優しい世界を、目指して。